慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『背徳者』の両義性 : 消去されたテクスト解読の試み
Sub Title	Ambigïté de L'Immoraliste : Essai de dechiffrement d'un texte effacé
Author	若林, 真(Wakabayashi, Shin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.13- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『背徳者』の両義性

——消去されたテクスト解読の試み——

若林　真

「……ぼくは自分を羊皮紙の二重写本（パリンプセスツス）になぞらえていた。あとで書かれた文章の下に、はるかに貴重なたいへん古いテクストをその羊皮紙に発見する学者の喜びを、ぼくは味わっていた。この隠れたテクストとは何だったのだろう？それを読みとるには、まず第一に後に書かれたもろもろのテクストを、消し去らなければならないのではあるまいか？」(1)

以上はアンドレ・ジッドの小説『背徳者』(2) L'Immoraliste（一九〇二年）の主人公ミシェルが、現在の自己からの脱皮を目指し〈新しい存在〉nouvel être に生まれ変らうとして、その逼迫した心意気を気持の昂りのままに表明したくだりである。これまでのミシェルは、敬虔とまではいえなくても行儀の良いキリスト教徒で、博識な古典文献学者であった。そして、キリスト教的西洋の文明社会が良しとする、すべての学識、教養、趣味、道徳規範、行動様式を身につけた模範的な青年紳士であった。その彼に、病気とそれからの快癒を契機として、価値の大転換が起こる。ある日ミシェルは翻然と悟ったのである、異郷の異教徒たちの住む非西欧的な非文明社会で生々しく体験した生命の陶酔にくらべれば、これまでの自分が後生大事にかかえてきた文明社会の書物や教養や知識などは取るに足りぬものであると。彼が

人生に関して抱いていたイメージは、すべて書物を通して得たものであり、彼はその生気ない知識を〈羊皮紙（パリンプセスツス）〉に書きつけて人生のすべてを覆いつくしてきた。しかし、徒な知識の文字で覆われた〈羊皮紙（パリンプセスツス）〉には、かき消された昔のテクストが、つまりは表面からはおぼろにしか見えぬ生の根源があるはずだ。彼の精神に積み重ねられてきた既得の知識が白粉のように剝げ落ち、彼の生の地肌そのもの、隠れていた真の存在 être authentique が、あらわに見えてこなければならぬ。隠れている真の存在とは、『聖書』の『ローマ人への手紙』でパウロが「キリストと共に十字架につけられた」とする〈古い人〉vieil homme、その罪の体である。パウロによれば、罪から解放された者、もはや罪の奴隷となることのない人間が、〈新しい人〉homme nouveau である。ミシェルの見つけ出そうとしているのは、それに反して〈古い人〉であり、すなわち彼のいう〈新しい存在〉にほかならない。ことばがまぎらわしいので整理をすれば、ミシェルはこれまでパウロの語る〈新しい人〉homme nouveau であったのだけれど、それを意志的努力によって抹消して、〈古い人〉vieil homme＝〈新しい存在〉nouvel être を自分によみがえらそうと志したのであった。[3]

当然、ミシェルの歩みはキリスト教の教えに背くもの、すなわち〈背徳者〉のそれとなるだろう。ミシェルはまっしぐらに〈背徳者〉の道を突き進んでゆく。われわれは三部構成から成るミシェルの告白物語を通じて、ミシェルの〈背徳者〉ぶりがどんな態のものであるかを、おおよそのところ把握できるのであるが、作品の表面に書き連ねられている文字の下に、いかなる〈古い文章〉、〈古いテクスト〉が隠されているのか、そのことが物語を読み進むにつれて大いに気がかりになってくる。つまりわれわれは、ミシェルの告白物語が、古いテクストを奥にひそめた一種の〈羊皮紙（パリンプセスツス）〉であることに気づくのである。ミシェル自身がそれを明確に意識していたかどうかは、問うところではない。作者ジッドがつねづね主張しているように、人びとは自分の語りたいことが何であるかを知っているとしても、はたしてそのこ

とだけしか言わなかったかどうかはつまびらかでないし、おおむね自分の意図する以上のことを、無意識のうちに語っているものだからである。

われわれはミシェルの告白物語の表面のテクストではなくて、その背後に隠されたテクストの文字を解読してみなければならぬ。[5] 当然この解読の方向は、物語におけるミシェルの蘇生の道筋の逆、すなわち〈新しい存在〉＝〈古い人〉から〈新しい人〉へのそれとなるはずだ。ミシェルの告白物語の本文には、パウロの語る〈新しい人〉への手がかりとなる『聖書』の一節がさりげなく、しかし二度にわたって挿入されている。一度目は第一部、第五章、二度目は第三部の終末に近い個所[6]で、いずれもビスクラを発つ前夜のミシェルの心境を語った部分である。

第一部のミシェルは健康の回復による生命蘇生の歓びに酔い痴れているさなか、ふと皓々たる月明りに照らされた風景を眺めているうちに、生の悲劇感のようなものが心を浸してきて、なにげなく『聖書』をひもとき、『ヨハネによる福音書』第二一章・一八節のことばを目にとめたのだった。ミシェルがその「二度と忘れえぬ」聖句を二度目に思い浮かべるのは、病妻を伴ってビスクラからトゥグールへと向けて発つ前夜のことである。〈古い人〉＝〈新しい存在〉に蘇生したミシェルは、新しい倫理の確立のために、いまだに〈新しい人〉を脱皮できぬ病妻マルスリーヌを、後掲の注(7)の引用文が語る〈暗黒の神〉への犠牲に供しようとしている。それでも、第一部における聖句の想起は、突如として冬の眠りからさめ、水に酔い痴れて、新しい生気に潑剌とかがやき、狂おしい春に笑いさざめく生の昂揚のさなかに、ふと心中にきざした生の悲劇感を契機とするにとどまっているが、第三部において聖句を想起するミシェルには、ほがらかな生の横溢感、力あふるる生の調和感はいつの間にか消え失せて、いまや手負いの獣のように追いつめられている。そして、「いま、芸術がぼくから去っていくような感じがする。他の何を代わりにあてるためなのか？　それはも

はや、以前のようににこやかな調和ではない……。いまのぼくにはもう、おのれが仕えている暗黒の神がわからない。ああ、新しい神よ！　美の新しい種族、美の思いもかけぬ姿を、われに知らしめたまえ」[7]（傍点筆者）――こんな窮鼠の叫びを、ミシェルはあげるまでにいたる。第一部の「明」から第三部の「暗」への移行に、ミシェルのドラマはあると見受けられるのだが、いずれの場合にあっても、『ヨハネによる福音書』第二一章・一八節の聖句がミシェルの心の底部を強烈に揺り動かしていることは、疑いを容れない。

その聖句はどんなものであったか？　聖句の前後関係はどうだったのか？　聖句のオーソドックスな解釈はどうなのか？　ここでわれわれは、この問題の検討に入らなければなるまい。聖句の全文は以下のごとくである。「誠に誠に、なんぢに告ぐ、なんぢ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん」

これは復活したイエスがその弟子シモン・ペテロたちの前に姿をあらわした際、ペテロに告げたことばである。この前に、イエスは三度にわたってペトロに向かって、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」（一六節）とたずねているが、ペテロはかかる問いを三度も発せられたことに心を痛めて、「主よ、知りたまはぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたまふ」（一七節）と答えている。いま問題の聖句はこの問答の直後につづくことばであり、福音書の筆者はさらにつづけて、「是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言ひ給ひしなり」（一九節）と註記している。

ところで、ミシェルの告白物語の本文においては、第一部では「されど老いては手を伸べて……」で、第三部では「自ら帯して欲する処を歩めり……」で、聖句は中断されている。ミシェルがここで全文を引用しなかったのは、むろん全部を知らなかったからではあるまい。博学の士ミシェルにそんなことがありうるわけがない。聖句の意味するところ、

前後関係、時代背景、その他もろもろを、彼は知悉していたはずである。いったい何故に、ミシェルはこの聖句に戦慄したのだろうか？　註記に明らかなように、先の聖句はペテロの殉教の運命を予言したものである。「手を伸べて他の人に帯せられ……」は、十字架刑の暗示だという解釈もある。当然、ミシェルの戦慄は、殉教者として迎えなければならぬ自己の将来の運命、しかも磔刑による最期の予感に由来するものであろう。さらに、イエスの使徒たちは数あるなかでペテロという名前は、とりわけミシェルの意識の深部に暗影を投ずるものだったに違いないが、それは、ペトロの裏切り者の過去のゆえだったろう。最後の晩餐を終えてオリーブ山に向かったイエスは、忠誠を誓うペトロに、「まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし」と厳かに警告する。それを打ち消してペトロは、「われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず」とむきになって抗弁する（『マルコによる福音書』第一四章・二九～三一節）。しかし、事の成り行きはイエスの予言どおりであった。師イエスが裁かれている大祭司カヤパの邸で、累が自らに及ぶのを恐れたペテロは、イエスとの関わりを三度にわたって否認する。その間の経緯は左のごとくである。

「ペテロ外にて中庭に坐しいたるに、一人の婢女きたりて言ふ『なんぢも、ガリラヤ人イエスと偕にゐたり』かれ凡ての人の前に肯はずして言ふ『われは汝の言ふことを知らず』かくて門まで出で往きたるとき他の婢女かれを見て、其処にをる者ども向ひて『この人はナザレ人イエスと偕にいたり』と言へるに、重ねて肯はず契ひて『我はその人を知らずといふ。暫くして其処に立つ者ども近づきてペテロに言ふ『なんじも慥にかの党与なり、汝の国訛なんぢを表せり』爰にペテロ盟ひ、かつ契ひて『我その人を知らず』と言ひ出づるをりしも、鶏鳴きぬ。ペテロ『にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』とイエスの言ひ給ひし御言を思ひ出し、外に出でて甚く泣けり。（『マタイによる福音書』第二六章、六九～七五節）

『背徳者の』ミシェルは、聖句の内容を熟知していたからこそ戦慄していたはずなのだけれど、聖句自体に関する直接的な評釈や感想はまったく洩らしていない。だから、われわれは、あれやこれやの事情を十分に考慮した上で、聖句に向かいあったミシェルの心理を憶測してみるより致し方あるまい。ごく素朴に考えて、ミシェルの恐怖戦慄の一つの原因は、自己を裏切り者と認識していることから来るとも考えられる。かってはパウロの語る〈新しい人〉であったのに、〈古い人〉＝〈新しい存在〉に変身しようとして、次々に〈新しい人〉の倫理・道徳や良風美俗を覆してゆく。作中の神秘的な冒険家メナルクの言動が、ミシェルの行動にますますはずみをつけてゆく。ミシェルが作者アンドレ・ジッドの一時期の思想的分身であるとすれば、メナルクには一時期のジッドに強烈な影響を及ぼしたオスカー・ワイルドやフリードリヒ・ニーチェ、[8] なかんずく後者の影が色濃く射しているようだ。ジッドはニーチェを左のごとく評しているが、その評言は『背徳者』の扇動者メナルクのことばを理屈っぽくしたもの、理論的表明に変えたものにほかならない。

「なるほど、ニーチェは破壊する。堀り崩す。しかし、絶望した男としてではなく、狂暴な男としてであり、高貴に、輝しく、超人的に、あたかも真新しい征服者が古い事象を強引に打ち壊すように、行うのである。そこに注ぐ熱狂を、建設のために他人に与え直す。休息、慰安、生に減少や麻痺や睡気をもたらすすべてのものへの嫌悪、そういったものこそが、彼を促して壁や天井を打ち破らせるのである。《人が生産力を持つのは、敵対関係がどっさりとあるときにかぎる。人が若々しいままでいられるのは、魂が弛緩しておらず、休息を願っていない場合にかぎる》、と彼は言っている。彼は疲弊した所業を堀り崩すが、新しい所業を成すわけではない、――彼はそれ以上のことをする、彼は職人たちを形成するのである。彼はその職人たちにいっそう多くのことを要求するために破壊し、彼らを追いつめる。

すばらしいのは、ニーチェが同時に彼らを愉快な生命で充ちあふれさせていることだ、彼らといっしょに残骸のまっただ中で笑っていることだ、力いっぱいそこへ種を蒔いていることだ。死滅したものや陰気なものを叩き壊すときほど、彼が生命に赤く燃え上っているときはない。そんなときには、どのページにも創造的エネルギーが充満し、そこに定かならぬ新しいものがうごめいている。ニーチェは予見し、予感し、呼びかける――そして笑う。――すばらしい作品？――いや――すばらしい作品の序文だ。破壊する、ニーチェが？　いやはや！　彼は建設しているのだ、――彼は建設しているのだよ！　彼は力いっぱいに建設しているのだよ。」（一八九八年十二月十日『アンジェールへの手紙』[9]）

このような生の道を驀進しようとしているミシェルは、〈反キリスト〉たろうと明確に意志しているのであるから、意志弱きがゆえに心ならずもイエスを否んだペテロの裏切りなどに怯える必要はないはずである。にもかかわらずミシェルが『ヨハネによる福音書』の聖句に怯えているのは、彼がいまだに〈新しい人〉を抹殺しえていないことを証しているのではあるまいか？　ミシェルが選んだ生の指針は驚くばかりにニーチェのそれに酷似しているけれども、ミシェルにはどことなく優柔不断なところ、ふんぎりの悪いところ、腰くだけなところがある。[10] ミシェルはペテロと同じように三度にわたってイエスを否んだ。三部構成[11]によるミシェルの告白の各部は、否認の各段階を示している。第一部の彼は典雅な古典文献学者であった自己、その自己を成り立たせていた西欧キリスト教文明社会の良風美俗を否認する。第二部の彼は自分を育んできたノルマンディの豊かで温和な土地、そこに住む人々の善意や友情を否認する。第三部の彼は〈新しい神〉、〈暗黒の神〉に仕えようとして、善意に満ちてはいるけれども脆弱な妻の心身を破壊し、引いては自己自身をも破壊するに至る。テクストの表面だけをなぞってゆけば、ニーチェ的価値転換を目指すミシェルの意志的行為の軌跡しか見えてこないのだけれど、二度にわたって『ヨハネによる福音書』の聖句が挿入されることによって、ミシ

ェルの〈裏切り〉と〈否認〉と〈破壊〉の道行きは、ペテロのイエス否認と同じように心ならざるものであったのではないかという疑いが、読者の心にかもし出されてくるのだ。しかも、第三部で『ヨハネによる福音書』の聖句を想起するミシェルは、疲労困憊その極に達してといおうか、あるいは慚愧の情もだしがたくといおうか、ペテロのごとく「……外に出でて甚く泣けり」というふうな状態に追いこまれている。もしそうであるならばミシェルの告白の〈羊皮紙〉の表面のテクストの下に、「神の栄光を顕す」者としてのミシェルの信仰告白の文字が隠されていることになろう。ためつすがめつすれば、〈背徳者〉どころか〈殉教者〉ミシェルの姿さえ見えかねないのである。

われわれ読者にこのような読み方を促す暗示的なことばは他にもある。そもそも『背徳者』という作品は、ミシェルの告白を友人の一人が書き写して、それをその友人の兄に送りとどけるという形式で構成されているわけであるが、告白の聞き手であり記録者でもある友人は、その兄への手紙にこんなことばを書き記している。

「ご存じのように、学校仲間としての友情から、すでにドニとダニエルとぼくはミシェルに固く結ばれていたのですが、この友情は年々大きくなっていました。ぼくたち四人のあいだに契約みたいなものが取り決められ、仲間の一人からのどんなにささいな呼びかけにも、他の三人は応ずることになっておりました。だから、ミシェルから危急を告げる不可思議な叫びを受けとると、ぼくはただちにダニエルとドニに知らせ、三人ともすべてを放擲して出発したのです。」

友人はこう述べた上で、ミシェルの別人と見紛うほどの変貌を語り、その後で次のごとく手紙をしめくくっている。

「ぼくたち三人は、ヨブの三人の友だちさながらに、火のように燃える平野へ急激に沈んでゆく太陽に見とれながら、待ちもうけておりました。

夜になってからミシェルは語りはじめました。[12]」

ここにヨブという名前が表われるが、言うまでもなく『旧約聖書』の『ヨブ記』の主人公のことである。しかも単なる比喩としての登場でないのは、『ヨブ記』の次にかかげる記述との紛うかたなき類似を見れば、一目瞭然であるはずだ。類似をきわだたせるために『口語訳聖書』[13]から引用してみよう。

「時に、ヨブの三人の友がこのすべての災のヨブに臨んだのを聞いて、めいめい自分の所から尋ねて来た。すなわちテマンびとエリパズ、シュヒびとビルダデ、ナアマびとソパルである。彼らはヨブをいたわり、慰めようとして、たがいに約束してきたのである。彼らは目をあげて遠方から見たが、彼のヨブであることを認めがたいほどであったので、声をあげて泣き、めいめい自分の上着を裂き、天に向かって、ちりをうちあげ、自分たちの頭の上にまき散らした。こうして七日七夜、彼と共に地に座していて、ひと言も彼に話しかける者がなかった。彼の苦しみの非常に大きいのを見たからである。

この後、ヨブは口を開いて、自分の生れた日をのろった。すなわちヨブは言った、

わたしの生れた日は滅びうせよ。[14]」

さて、ヨブとはいかなる人物であるか？　「そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」（『ヨブ記』第一章・一節）と聖書に記された義人である。そのヨブに対して神の許しを得たサタンが世にも恐しいありとあらゆる災厄を及ぼして、信仰心を試そうとするのだ。ヨブは財産や肉親を次々に奪われ、あげくには足の裏から頭の頂まで腫物に悩まされ、陶器の破片を取って、それで自分の身をかき灰の中にへたりこまざるをえないほどの惨状に追いこまれている。義人ヨブといえども、神などあるものかと悪罵の叫びを発したくなるほどの、不条理きわまりない惨禍に

見舞われているわけだ。このような苛烈苛酷な試練にさらされているヨブは、心が千々に乱れたときには、おずおずと神への呪詛のことばを洩らしたりもするが、結局はサタンの誘惑に勝ち、神へのゆるがぬ信仰を表明する。それを嘉した神は、物心両面で倍旧の繁栄をヨブにもどしてやる。『ヨブ記』の話の大筋は以上のとおりである。これに照して解釈するならば、『背徳者』のミシェルも義人であったのだが、サタンの術中に落ちて〈背徳〉の道を辿った、ということになろう。では、『背徳者』におけるサタンとは誰か？　もちろん、その代表はメナルクであろうが、その彼にとどまるものではなく、モクティルをはじめとするアラブの不良少年たちであり、アルシードやビュットのようなノルマンディの不良少年やならず者たちである。いや、人間にとどまらず、アフリカの官能的な大地、南イタリヤのきらきら陽光も、物象化されたサタンといえるかもしれない。しかし、ヨブとミシェルとの最大の相違は、ヨブの瀆神のことばが、心ならずともいつた感じの、おずおずしたものであり、終局はヨブのサタンへの勝利に帰着するのに対して、ミシェルの瀆神行為は意志的・意図的であって、彼は激しい情熱をこめてサタンの誘惑に身をまかせようとしているのだ。従って、ミシェルのサタンへの勝利は、彼がサタンの誘惑に抗し切ることにあるのではなくて、サタンの誘惑にどこまでも追随してゆくばかりか、その一歩先まで前進するところにあるはずだ。〈暗黒の神〉に献身して、病妻を死の破滅にまで追いやることができたミシェルは、その意味で輝しい勝利者であるはずなのに、作品の末尾で示されるミシェルのどこに、そんな誇らしさ、意気旺んなところがあるか？

「……ぼくの真の人生は、まだはじまってないような気がするときがある。いまここから、ぼくを引きだしてくれたまえ、そして生きていることの意義をあたえてくれたまえ。ぼくにはもうそれが見つけられないのだ。ぼくは解放されたのもしれないが、しかし、そんなものが何になる？　ぼくはいま、この使いみちのない自由に苦しんでいるのだか

ら。……（中略）……ぼくをこの土地から引きだしてくれたまえ、自身ではその力がないのだ。」[15]

これはまさしく、窮地に追いつめられた敗者の言である。「ぼくをこの土地から引き出してくれたまえ」と友人たちに訴えているミシェルは、まさしく愁訴もここにきわまった手を差し伸べて、友人たちに助けを求めているのだ。こうしてまたしても、『ヨハネによる福音書』第二一章・一八節の聖句が、ミシェルの告白物語の〈羊皮紙（パリンプセスツス）〉の表面の文字をかき消すようにして浮かび上ってくる。若いころのミシェルは自ら帯（おび）して欲する処を歩んできた。しかしいまや進退きわまって、他の人に帯（おび）せられ、彼の欲せぬ処に連れてゆかれようとしている。彼の欲せぬ処とはどこか？　それは、ミシェルの告白の聞き手＝記録者の友人が、ミシェルの救出を懇請している内閣総理大臣D・R氏[16]に代表される近代西洋のキリスト教国家である。それはすなわち、一度はミシェルが弊履のごとく放擲した〈新しい人〉たちの社会であるはずだ。たしかに彼はこの社会の〈背徳者〉であったが、自らの敗北を宣し、敗北の十字架につけられることによって、逆方向から神の栄光を顕わすことになる。もちろん、ミシェルはそこまで語っているわけではないし、彼の友人が望むように内閣総理大臣D・R氏の社会に本当に復帰できるかどうかも明らかではない。いや、そんなことよりもさらに問題なのは、「ぼくをこの土地から引き出してくれ」とミシェルは訴えてはいるものの、自分の連れて行ってほしいところが本当はどこであるのかを、彼がいっこうに明確にしていない点である。とはいえ、彼の告白の末尾から察するに、どうやらミシェルは、ニーチェ主義の断崖から飛び降りるのを思いとどまったらしいのだ。断崖の一歩手前で踏みとどまったらしいのだ。[17] そうと見て取ったからこそ、ミシェルの友人たちはおのれをヨブの三人の友になぞらえたのであろう。ミシェルの告白の聞き手＝記録者の友人は、そのとき、『ヨブ記』第四二章・一～三節のヨブののことばを思い浮かべていたかもしれない。

「ヨブ是に於てエホバに答へて曰く我知る汝は一切の事をなすを得たまふ　また如何なる意志にても成すあたはざる無し　無知をもて道を蔽ふ者は誰ぞや　斯われは自ら了解ざる事を言ひ　自ら知ざる測り難き事を述べたり」

こうなれば、ミシェルの〈背徳者〉への道もまた、神の〈意志〉だったということになるだろう。ミシェルもまた、裏返しの義人だったのではあるまいか。ミシェルの告白物語の〈羊皮紙〉の表面の文字の下には、義人ミシェルの面影が見えつかくれつしている。かくのごとき作品解読の方向が妥当であるか否かを、作者シッドは序文のどこにも明らかしていないばかりか、ことさらに作品の含蓄を曖昧にしてはいる。とはいえ、序文の前に置かれた作品全体のエピグラフの重みを見落すわけにはいかないだろう。言うまでもなく、エピグラフは作品の含意を総括要約しているものだ。それは以下のとおりである。「われなんぢに感謝す、　われは畏るべく奇しくつくられたり」（『詩篇』一三九篇・一四節）そして、そのあとにつづく聖句は「なんぢの事跡はことごとくくすし」である。これは聖歌隊の指揮者によって歌わせたダビデの歌であり、全知全能の創造主への讃歌なのだ。ミシェルという〈背徳者〉もまた「奇しき被創造物」créature admirable であり、そのような人物を創り出した神の「事跡」は「くすしい」admirable のである。

われわれはこれまで、ミシェルの告白物語の表面テクスト、つまり〈新しい存在〉＝〈古い人〉を前面に押し出した〈羊皮紙〉の文字をかき消して、〈新しい人〉の存続を物語った古いテクストを探し求めてきた。そして、この作業の終りに『詩篇』一三九篇・一四節の讃歌に辿り着いた。さりながら、『背徳者』という小説を、〈新しい存在〉＝〈古い人〉に対する〈新しい人〉の終局的勝利というふうに結論するのは、やはり早計というべきだろう。作者ジッドもその辺の事情は十分に心得ていて、序文において「わたしはこの書物で告発も弁明もおこなうつもりはなく、是非の判断をさしひかえていたのだった」と述べ、さらにつけくわえて、「もちろんわたしは、中立（逡巡といってもよかろう）が偉

大な精神のたしかな証(あか)しだと主張するつもりはないが、多くの偉大な精神は結論を下すのを……大いに嫌っていたし――ひとつの問題が立派に提起されたからといって、あらかじめ解答が出されていることにならないと思う」[18]と書いて、性急な読者たちの速断をいましめている。要するに、『背徳者』という小説のドラマは、〈新しい存在〉＝〈古い人〉と〈新しい人〉との激烈なせめぎ合いであり、あるときは前者が後者に力づくの後退を迫り、あるときは後者が前者を激しく押し返し、最終的な勝敗の帰趨が明らかにされていない、というか、明らかにされないように作品はつくられているのである。[19]その意味で、序文末尾の「要するにわたしは、なにごとも証明しようとせず、よく描き、自分の描いたものをよく明るみに出そうと努めただけなのである」[20]という作者のことばは、額面どおりに受け取っていいと思う。ここにあるのは、伝統遵守の人と反逆の人との果しない討論と対話であり、この作品の形成前後のジッドの実生活者としての有り様もまた、そんな態のものであった。そしてこの作品に、ジッド対母親、ジッド対従姉マドレーヌの相克のドラマの投影を見ることも可能であろう。伝統的諸価値を全面的に押し立ててことごとく息子の自由を拘束していた母親への反逆を企てつつ逃亡し、闘争に疲れ果てると束の間のやすらぎのように母親のふところに帰還して行ったジッド、その母親を失うと解放感をおぼえるどころか、母親の精神的分身のごとき従姉マドレーヌを生涯の妻として求めざるをえなかった動揺たえ間ないジッドの、反逆と帰順のめまぐるしい交替交錯のドラマの反映を、『背徳者』という小説に難なく読み取ることもできるだろう。

ところで、すべてが両義的に仕組まれているこの小説で、勝敗の帰趨のはっきりしていることが、ただひとつだけある。純粋に文芸的・美学的見地だけに視点を限るならば、『背徳者』にあっては、〈新しい人〉が〈新しい存在〉＝〈古い人〉に勝利を収めているのではあるまいか。芸術作品は拘束の所産である、すぐれた芸術作品を産み出すには、芸術

家が詩人にとってかわらなければならぬ、古典主義芸術とは芸術家の詩人に対する勝利であるはずだ、このような後年ゆるぎないものになる芸術観[21]を、ジッドは『背徳者』ではじめて見事に実践しえたからである。本論文の文脈に照して用語を選ぶなら、このばあい詩人とは自然的人間＝〈古い人〉であり、芸術家とは意志的拘束の人間＝〈新しい人〉である、さらに比喩を拡げれば前者はロマン主義者であり、後者は古典主義者である。そして、優れた芸術作品は両者の激突を前提としながら、終局的には後者が前者を圧倒し包みこむという形で成立するのが常である。大まかにいえば、これが古典主義者ジッドの芸術論・文芸論の要諦である。その具体的な有り様は『背徳者』の第二部において、ノルマンディ地方の豊かさを讃美する趣旨で次のごとく述べられている。

「……ここにおいては、自由な自然の豊かな爆発と、それを規制しようとする人間の賢い努力が、ひとつの完璧な了解のうちに溶けあい、人はもはや自分が何に感嘆しているのか、わからなくなるのだった。ぼくは考えていた、こういう努力も、制御の対象となる強力な野性がなければ、何だろうかと、また、このあふれんばかりの生気の荒々しい躍動も、それを堰き止め、にこやかに豊饒へと導く聡明な努力がなければ、何だろうかと。――そして、あらゆる力が立派に規制され、あらゆる出費がきちんとつぐなわれ、あらゆる交換が厳格におこなわれて、どんなにささいな損耗も感知できるような、そんな土地のことを、ついついぼくは夢想していた。……」[22]

ミシェルの語るこのノルマンディ地方のラ・モリニエール讃歌は、まさしくアンドレ・ジッドの古典主義芸術論・文学論である。そして、〈自然的人間〉＝〈古い人〉＝〈新しい存在〉＝〈詩人〉＝〈ロマン主義者〉ミシェルの敗北をもって終る『背徳者』という小説は、その敗北の経緯を、見事な文体による厳密細緻な作品構成[23]のうちに鮮かに描出することによって、ノルマンディ地方の大地のように実り豊かな文芸所産と化したのである。ここには、〈意志的拘束の

人間＞＝＜新しい人＞＝＜芸術家＞＝＜古典主義者＞アンドレ・ジッドの、新進小説家としての輝しい勝利があった。(24)

註

(1) André Gide: Romans, récits et soties, œuvres lyriques, Bibliothèque de la Pléiade, 1958, p. 399——以下『背徳者』の引用文はすべて同版に依る。以下ページ数のみを記す。

(2) 『背徳者』は一九〇二年の Mercure de France 版に始まって、一九四九年の Union Bibliophile de France 版に至るまで十種類あるが、六種類に小説（ロマン）の銘があり、他の四種類は銘なしである。『背徳者』に物語（レシ）の呼称が与えられるのは、まず最初に一九一〇年に書かれた『イザベル』の序文草案（Cf. Œuvres Complètes d'André Gide, Tome VI, nrf, 1934 pp. 361～362）においてであり、つづいて『法王庁の抜け穴』の削除された序文においてである（Cf. André Gide: Journal 1889～1939, Bibliothèque de la Pléiade, 1948, p. 437—le 12 juillet 1914—）。

(3) 『ローマ人への手紙』第六章・六節。

(4) Ibid., p. 89『パリュード』の序文

(5) Cf. Andrew Oliver: Michel, Job, Pierre, Paul, intertextualité de la lecture dans *L'Immoraliste* de Gide, Archives des lettres modernes 183, 1979. Andrew Oliver: Michel et Job, la dialectique biblique dans *L'Immoraliste in* André Gide 6, perspectives contemporaines, Lettres Modernes Minard, 1979. 本稿は上掲両論文から貴重な示唆を得ている。

(6) Ibid., p. 397, p. 467

(7) Idid., p. 467

(8) ジッドのオスカー・ワイルドとの出会いが、本書のメナルクの言動にさまざまな影を落していることは疑いを容れない。たとえば、メナルクについて「最近、あるスキャンダルをめぐって、ばかばかしい、不明誉な訴訟が起こり、それが彼に泥をぬる絶好のチャンスを新聞に提供していたのだった。彼の人を見下したような態度に傷つけられた連中は、これを口実にして復讐の挙に出た。」(Ibid., p. 425) というふうなコメントは、ワイルドとダグラス卿とのスキャンダルを念頭に置いたもの

であろう。しかし、ワイルドの影はどちらかといえば表面的なもの、挿話的なものにとどまっているのに対して、ニーチェの影はメナルクの、引いてはミシェルの思想の深部に及んでいるようである。しかし、ジッドは『背徳者』執筆中に（作品完成は一九〇一年十月二五日）ニーチェを発見したと主張し（Cf. Journal, le 4 août 1922, op. cit., p. 739）、そこにある類似は影響によって生じたものというよりは、両者の思想の偶然的な親近性によるものだと、折あるごとに主張しているものの、ジッドがニーチェを知ったのは一八九二年か九三年であると推定されている（Cf. René Lang: André Gide et la pensée allemande, Egloff, 1949, p. 90）。ともかくも種々の状況から判断して、ジッドのニーチェへの親炙はかなり早い時期に始まっていたようだ。一八九八年の十月に書かれ、一八九九年の『エルミタージュ』に発表された『ニーチェ論』（『アンジェールへの手紙』――一八九八年十二月十日）には、ジッドのニーチェに対する概括的な行きとどいた理解が見られるのであるから、少くとも『背徳者』完成時のジッドは、ニチェの思想を自家薬籠中のものにしていたと判断される。従って、ジッドの言うニーチェ発見の時期とは、その十全の理解に達しえた時期と解すべきであろう。あるいまた、自作にニーチェの直接的影響を看取されることを嫌ったジッドの、作家・思想家としての自尊心の言と解することもできよう。

(9) Œuvres Complètes d'André Gide, Tome III, nrf, 1933, pp. 230～231.

(10) 反キリスト教、反理性主義、背徳主義、罪への反感、律法への反感、教養＝文化への反感、礼節への反感、清潔への反感、安息の拒否、個人的価値への飽くなき執着、危険な生き方への執着、生や官能への賛美、弱者への軽蔑、これらのどれ一つを取っても、ミシェルはニーチェ主義者であることは明らかだが、重要な相違もある。ミシェルは結局のところ解放による「使いみちのない自由」をもてあまして敗北するのに対して、ニーチェは自己への不断の勝利を経て、〈超人〉の理想に達しようとする。こう見てくると、結末のミシェルはワイルドの面影の方を色濃くしているようだ。

(11) 三という数字の重要性に着目している論文がある。偶然の一致と見るべきか、意図的と見るべきか、にわかには断じがたいが、人物、時期、事件のさまざまな組み合わせにおいて、三という数字が頻出することは確なようだ（Cf. B. T. Wilkins: *L'Immoraliste* Revisited *in* Romanic Review, April 1962, R. Goodhand: The Religious Leitmotif in *L' Immoraliste in* Romanic Review, December 1966）。

(12) Ibid., pp. 369～371.

(13) 日本聖書協会刊・一九五五年改訳版。

(14) 『ヨブ記』第二章・一一節――第三章・三節。
(15) Ibid., p. 471
(16) 註(5)の第一の論文において、筆者は Monoieur D. R. Président du Conseil のイニシャル D. R. は Deus Rex (王なる神)のイニシャルではないかと推測している。面白い推測ではあるが、あまりにもうがちすぎていて、にわかには同じがたい。
(17) 断崖を飛び降りれば、待ち受けているのはニーチェがおちいった狂気であろう。
(18) Ibid., p. 367
(19) このようなジッド特有の精神の様態を、ある批評家は「情熱的な逡巡」と評した(Cf. Maurice Maucuer: Gide, l'indécision passionnée, Edition du Centurion 1969)
(20) Ibid., p. 368
(21) Journal, le 11 janvier 1892, op. cit., pp. 29～30
(22) Ibid., pp. 410～411
(23) 『序文』、『内閣総理大臣D・R氏へ』、三部構成によるミシェルの告白物語は、それぞれが重ね合わさるような形をつくりながら、作品全体の奥行きを深くしている。註(11)に記したように、にわかには同じがたいものの、偶然と評するにしてはあまりにも数多い三という数による様々な組み合わせなどにも、芸術家ジッドの厳密な方法に則った構成意図がうかがわれる。また、前記註(5)の第一論文でアンドルー・オリヴェールは、ミシェルの第一回目のビスクラ出発後の道程は、聖パウロの第四回目の伝道旅行の最後の道程と正確に一致している、と指摘している(op. cit., p. 53)。これもまた単なる偶然の一致かもしれないが、あるいはそこにジッドのパロディ形成の意志が働いていたかもしれない。さらにまた、作品全体に厳密な音楽的構成を看取している研究家もいる、第一楽章アンダンテ(かなり長いプレリュード)、第二楽章短いアレグロ(ミシェルの病気快癒)、第三楽章ピアノ(平常の世界への復帰)、第四楽章リンフォルツァンド(急激な転落)――Cf. Pierre de Boisdeffre: Vie d'André Gide Tome I, Hachette, 1970, p. 427―。
(24) 一九〇二年に Mercure de France 版の初版が三〇〇部出版されてから十五年を経た一九一七年に、ようやく Georges Crès et Cie 版一二二二部が出版されている。この発行部数から察しても、作品の出版当初はほとんど人びとの関心を集めなかっ

たことがうかがわれる。エドモン・ジャルー、マルセル・ドルーアン（時によってはミシェル・アルノーの筆名）、シャルル・ラコスト等の熱烈な賛美者もいたが、友人たちの大方はこの作品の評価に当惑していたようである。ジッドの名声が確立されるに及んで、『背徳者』はようやく遡及的に高い評価を受けるに至った。昂ぶった抒情を厳密な構成のなかに緊張感と逼迫感をもって閉じこめることに成功した『背徳者』のみずみずしさは、他にその類を多く見ない。アンドレ・ジッドが発表した初めての小説らしい小説であるこの作品が、発表当初にこうむらざるをえなかった無視と不評は、往々にして傑作を見舞う悲運のようなものであろうか。